

広島県三原市

視察日程：令和8年2月9日（月）午後1時30分から午後3時まで

視 察 先：広島県三原市

視察内容：三原市児童館「ラフラフ」整備・運営事業について

視 察 者：中山貴弘議員、藤沢 巖議員、藤井貴範議員、林 正則議員

1 三原市の概要

人 口：85,575人

面 積：471平方キロメートル

概 要：2005年3月22日に三原市、本郷町、久井町、大和町の1市3町が合併してきた市で、今年で市制施行21年目を迎える。人口は約8万5,000人で、江の川の分水嶺を有し、広島県の中央部に位置する。1567年、小早川隆景により三原城が築城。現在のJR三原駅は三原城址（天主台跡）と一体化しており、全国的にも極めて珍しい構造となっている。広島空港、重要港湾、JR、高速道路と「陸・海・空」の交通機関が集結している。

2 視察内容

(1) 施設の概要について

児童福祉法第40条に基づく児童厚生施設で0歳から18歳までが登録不要で利用可能

所 在 地：広島県三原市城町1丁目2番1号 ペアシティ三原西館2F

開館時間：10時～19時

休 館 日：毎週火曜日、お盆、年末年始

運営主体：三原市

職員体制は会計年度任用職員6人、うち1人はファミリー・サポート・センターアドバイザー

特 徴：中高生と一緒に作った児童館

施設を利用する子どもたちや保護者が運営に関わっている

(2) 開設の経緯について

公共施設マネジメント及び中心市街地の賑わい創出、子育て支援の充実に向け、市内唯一の児童館として、令和2年8月に市内の別の場所から移転オープンした。

児童館は18歳まで利用できるが、移転前は中高生の利用が少なく、利用者全体の3%で1日平均1.3人だった。そこで、新しい児童館では、「中高生も気軽に遊びに来れる場所」「中高生が活躍できる場所」「家、学校以外の第3の居場所」にするため、中高生の意見を聞いて一緒につくることにした。

ア 新児童館ティーンズ検討委員会の立ち上げ（平成31年2月）

(ア) 新児童館をプロデュースする中高生を募集（平成30年11月募集開始）

(イ) 月1回程度のミーティングを開催（計10回）

中高生の利用を増やすための施設機能の検討や児童館レイアウト案の意見聴取等

イ 市内の高校との連携（令和元年6月～）

高校の授業「総合的な探究の時間」で、中高生利用増の方策を生徒が検討・提案

(3) 乳幼児から高校生までの多世代交流拠点としての施設整備について

ラフラフで活動するグループ

中高生の活躍に刺激を受けた小学生や大学生、保護者なども加わり世代を超えて活動

(ア) あかちゃんスタッフ（0～3歳児の子どもと保護者41組）R5.5月結成

(イ) きっずスタッフ（小学3～6年生20人）H31.4月結成

(ウ) ティーンズスタッフ（中高生65人）H31.2月結成

(エ) ユニスタッフ（大学生103人）R4.8月結成

(オ) サポーターズ（保護者・ティーンズスタッフ卒業生ほか12人）R3.11月結成

(4) 中高生との協働運営の取組について

ア ラフラフティーンズスタッフ（中高生）※旧新児童館ティーンズ検討委員会

(ア) 放課後や休日に集まり、イベントの企画や子どもや保護者との交流など活動中

(イ) 現在メンバーは65人（中学生16人、高校生49人）

イ 中高生企画イベントの一例

(ア) ラフラフ t e e n s 塾

- ・毎月1回開催し、小学生の宿題などの分からないところを中高生がサポート
- ・勉強の合間に、読み語りやクイズなど中高生の考えた「お楽しみタイム」を実施

(イ) ラフラフ t e e n s 塾（発展編）

- ・授業形式のイベント
- ・自然現象などを手作りの資料を使って小学生に授業形式で解説
- ・科学実験、海外の文化や行事の紹介

(ウ) 自分たちの「得意」や「経験」を活かして、さまざまなイベントを企画・実施

- ・「高校生とレッツダンス♪」自由来館の子どもを対象にダンスの披露・指導
- ・「高校生とクッキング」小学生を対象に、考案したレシピを用いたクッキングイベント
- ・「遊んで学ぼう、大人への一歩」小学生と保護者を対象に、中学・高校生活の体験談や将来の夢などについて語る

(5) ラフラフ開設の効果と影響

中高生だけでなく、ラフラフ全体の来館者が増加

ア 令和6年度来館者数（開館日数：304日）

	乳幼児	小学生	中学生	高校生	一般	合計
来館者数（人）	11,481	8,863	3,732	4,817	13,765	42,658
割合（％）	26.9	20.8	8.7	11.3	32.3	100

イ 1日平均来館者数の推移

	H31	R2	R3	R4	R5	R6
全体（人）	43.7	93.5	84.8	95.1	120	140.3
中高生（人）	1.3	9.2	12.7	13.2	16.3	28.1

3 所感

<中山貴弘議員>

ラフrafは児童福祉法第40条を基に創設された、0～18歳までの子どもと保護者が自由に利用できる、敷居の低い「第3の居場所」として整備された施設である。駅前という好立地にある空き店舗を活用し、中心市街地のにぎわい創出にも寄与している点が印象的であった。

旧児童館では中高生の利用が極めて少なかったという課題があったが、ラフrafでは中高生の意見を丁寧に吸い上げ、一緒に施設をつくり上げるプロセスを採用している。この協働による施設づくりが功を奏し、市内4校の高校のうち三原高校からは毎年継続的に授業のオファーが寄せられていることから、中高生に受け入れられている施設であることがよく分かった。また、好きな漫画のリサーチ・購入や、中高生が主体となって企画するイベントなど、若い世代が行きたいと思える工夫が数多く見られた。

視察中、家族連れが楽しそうに遊ぶ姿を実際に見ることができ、ラフrafが安心して過ごせる温かな居場所となっていることを実感した。

特に、事業を続けられる理由として職員から伺った「部活動ではない、ゆるいつながりがよい」という言葉が印象に残った。縛られ過ぎず、しかし緩やかに関係性を保ち続けられる仕組みが、中高生ボランティアの継続や活動の広がりにつながっていると感じた。

また、外国籍の子どもに対し、中学生が自主的に勉強を教えたというエピソードや、若い母親が「自分の出産前には、ほかの赤ちゃんと触れ合う機会がほとんどなかったが、高校生が我が子と遊んでくれる姿が新鮮だった」と語った話など、世代を越えた交流が自然に生まれている点も大変印象深かった。若い世代が子育てに関心を持つことが、将来の少子化対策にもつながるといふ職員の言葉にも共感した。

ラフrafの来館者数は年々増加しており、市内で最も視察受入れが多い施設であることにも納得がいった。運営に当たっては「児童館ガイドライン」を策定し、方向性と質の担保を図っている点も大変参考になった。まとめとして、ラフrafは子ども、保護者、中高生、大学生など多様な世代が、互いに影響を与えながら育ち合う『多世代がつながる子育ての中心』として機能していた。

知多市においても、こうした多世代の居場所づくりは大いに参考になり、もし知多市に同様の施設があれば、市民にとって大きな効果が見込まれると感じた。今回の視察は、児童館の新たな可能性と、地域全体で子どもを育むまちづくりの重要性を強く学ぶ機会となった。

<藤沢 巖議員>

今回の先進地視察を通じて、児童館が子どもの遊び場に留まらず、子ども、子育て世代、地域をつなぐ交流拠点として重要な役割を果たしていることを確認できた。

「ラフraf」は、施設整備と運営が一体的に計画されており、利用者ニーズに応じた柔軟な空間活用や事業展開がなされている点が印象的であった。「ラフraf」の最大の特徴は、施設整備から運営まで、子どもたちの意見が積極的に取り入れられている点である。特に、移転前は中高生の利用が少なかったという課題を解決するため、「新児童館ティーンズ検討委員会」を立ち上げ、多くのヒアリングや座談会を重ね、中高生が自分たちの居場所として利用しやすいように工夫されていた。中でも、仕切りが付いた個別の机で集中して勉強できる学習室やダンスや演劇の練習

ができる鏡張りのスポーツ室の完備、更にはWi-Fi環境の整備など、中高生の意見を最大限に反映した施設となっていた。また、ボランティア制度も充実しており、小学生の「きっずスタッフ」、中高生の「ティーンズスタッフ」、大学生の「ユニスタッフ」、保護者の「サポーターズ」といった多様なグループが活動に参加しており、子どもたちがイベント企画や来館者との交流を通じて活躍できる場が提供されていた。

本市においても、地域特性や利用者ニーズを踏まえながら、施設の整備・運営事業に適切に反映させていくことが重要であると感じた。また、交流施設を整備するためには、施設整備の段階から将来的な運営を見据え、誰もが立ち寄りやすく、継続的に利用したくなる居場所づくりを目指すこと。加えて、子どもを中心に据えつつ、保護者や地域住民との関わりを育む運営体制を構築することが、施設の持続的な活用につながるものと再認識できた視察であった。

<藤井議員>

三原駅前という絶好の立地を活かした「ラフラフ」は、単なる行政施設を超えた、市民の活力あふれる拠点であった。

特筆すべきは、徹底した利用者目線の運営である。計画段階から「新児童館ティーンズ検討委員会」を組織し、中高生の生の声を反映させた。彼らが選んだ本や漫画を配架し、学生ボランティアの活躍を証明書で評価する仕組みを整えることで、利用率の低い中高生を見事に呼び込んでいる。さらに、この空間は子どもだけでなく、付き添いの保護者や乳幼児を連れた世代にとっても、大人自身がくつろげる「居場所」として機能している点が非常に優れていた。

施設の床は、木の床で、一部畳が使われており、自分の好きな場所でくつろげ、また、子どもたちが遊ぶ場所の隣に学習室があることで、中高生も勉強をしながら、息抜きで子どもたちと遊ぶこともできるようで、子どもたちの間で異世代間の交流もあり、学校では体験できない交流ができていたとのことであった。

翻って本市の現状を考えると、児童館を設置しない方針が継続している。しかし、子どもたちの安全な居場所の確保や、多世代が自然に交わり、それぞれが思い思いの時間を過ごせる拠点の必要性は、本視察を通じて不可欠であると痛感した。既存の枠組みに縛られず、三原市の事例のように子どもの感覚や利用者のニーズを柔軟に取り入れた、新しい時代の地域拠点の在り方を検討すべきであると強く感じた。

<林議員>

三原市児童館「ラフラフ」は、三原駅前の商業施設、ペアシティ三原西館に所在し、中心市街地の賑わい創出、子育て支援の充実を目的として令和2年8月に、市内の別の場所から、施設の空き店舗スペースを利用して移転オープンした。

中高生の主体的な関与が最大の特徴で、開館前から「新児童館ティーンズ検討委員会」を立ち上げ、中高生の意見を反映して設計・整備していた。オープン後も中高生がボランティアや企画運営に参加し、子ども主体で施設を育てている点が非常に先進的と感じた。本市の北街区に計画している屋内型子育て支援施設に向けて大変参考となる視察となった。